

■特別寄稿

町の単独存続と将来を見据えた振興策

南 政吾 (与論町長)

一市町村合併を、慎重に、慎重に熟慮していた与論町は、2003年11月に、海を越える合併を断念し、単独存続の道を選んだ。

近年の動向をみる限り、地元経済が大きく躍進する可能性はあまり高くない。それに加えて、財政運営も今後、急速に厳しさの度を増すと予想される。この苦しい環境のもとにあっても、南町長はぜんぜん弱音を吐かない。ヨロンの現実と格闘する町長の胸の内を語ってもらった。(プロジェクト代表山田誠) —

はじめに：「オンリーワンの島」づくりに込めた思い



昭和45年頃、15万人の観光客が来島し、若者の島として、与論島が一躍脚光を浴びたが、沖縄が復帰して、自然だけでは観光としてお客さんは呼べない。やはり観光は三要素である。実際に「観て」「体験して」、そして、「食べる」というこの三要素を十分満たさないと観光は長続きしないと言われているが、与論の場合もこの格言は当てはまる。観て、泳いで楽しむという2つの面はあったが、食の面ではまだ、課題を残している。そういう点も含めて、観光と農業・漁業は両輪の如くであ

るという考え方に立って農業も充実した産業として育っていかないと、観光も育たない。そして、その両輪の基本である島づくり、「人と自然が輝くオンリーワンの島」づくりを目標として、これからやっていこうと考えている。基本的には、有機の島づくりを通じて完結型の島づくりをしたいとの思いが、「人と自然が輝くオンリーワンの島」づくりのスローガンに込められている。

1. 和牛振興の原動力、現状と今後の課題

今、基幹産業を観光から和牛の方へということであるが、私どもは決してそういう考えではなく、観光と農業・漁業を両輪としてやっていくつもりである。ただ、和牛については、さとうきびの生産を考えた時に、関連する産業として、非常に和牛がいいという点で牛が、脚光を浴びている。牛とサトイモ、さとうきびと、この3つを合わせた農業を進めていきたいと考えている。牛については、高値がつく方策をとっていかないといけないと考えている。また、牛ばかりをすると、さとうきびの方で問題がでてくる面もあり、両方を相まってやっていきたい。牛については、特に、血統が重んじられ、血統次第で値段の高低がつくので、今後も、できるだけ血統のいい母牛、種の確保に努めるという考え方でいきたい。それにより、子牛が高く売れることにつながる。町有牛は特にその考え方で進めてきた。そして、成功の原動力には、和牛改良組合の方々の団結がある。これはどこにもないような団結の仕方である。「生きもの」を生活の糧とするのは非常に難しいと言われ

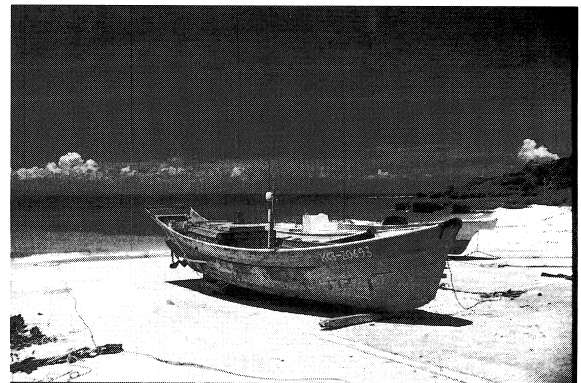
ている。24時間、休みなし。しかし、和牛改良組合の若い方々が中心となり団結して、お互いに助け合っているということによって、大きな生産につながっていると思う。今後も36,000トン以上のさとうきびが生産されないと、精糖会社の経営が成り立っていかないので、その辺も考慮に入れて、きびのトップを牛の餌として使えるようなかたちでの農業をやっていきたいと考えている。それに併せて有機の島づくり。牛糞などで地力をつける方向に進んでいきたいと考えている。平成16年には、堆肥センターが出来るので、大いに活用して、島の土づくりによって、化学肥料、農薬を解消していきたいと考えている。

2. 地域の観光資源を今後どう活かすか、高額な航空運賃の問題の打開策

本町の観光は昭和54年がピークで、62年ごろまでに降下線をたどってきている。これまでは夏場、若者が来て、遊んで帰るというかたちだった。今でも夏場については観光客はあまり減っていないわけだが、夏以外の観光客が急激に減ったために今、相当な観光客の減になっている。それを考えたときに、夏場の若者のためだけの島ではなく、よく言われている癒しの島づくりがキーワードになるのではないかと考えている。食については、有機栽培の食にしたい。そして、タラソテラピー（海洋療法）を取り入れた癒しの島づくりをしていきたいと考えている。タラソについては鹿児島大学の先生方のご指導をいただきながら、海洋療法を定着させていきたいと考えている。あくまでも民間型の施設で運営をしていきたいと考えている。

沖縄と比べて非常に割高な航空運賃のために、今後の観光については非常に憂慮されるところがあるが、私達は小さいがゆえにできるものを考え出してやっていきたいと考えている。高い運賃を払ってでも行く価値のある

島づくりをしていきたいと、特にそこには与論が今まで観光として脚光を浴びた大きなものになる「人情の島」、これを中心としてやっていけば、高い運賃を払ってでも行く価値のある島になるのではないかと考えている。



3. ADSL (Asymmetric Digital Subscriber Line; 非対称デジタル加入者回線) の活用法

本町の将来を考えた時、農業と観光を両輪としてやっていくと言ったが、島の活性化は、どうしても観光面が主体になる可能性がある。そこで財源となるものを考えたとき、現在の与論島では新たな産業を起こすことは難しい。産業を起こすには島が小さく、出来た産物を消費する消費地に非常に遠い。そして、資源が少ない等のマイナス面がある。そういった時に、島の活性化を図るには、どうしたら良いかということを知っていると、いろいろな方々から、第一に安心して住める島づくりをすすめる意見があった。それにはまず、良質な飲料水の確保。2番目に、大きな病院の整備。3番目に情報基盤整備をするという意見があった。以上の3点に答えることによって島の活性化につながる。そこでADSLが浮かんできた。これは仕事をして直接、都会とのつながりをもつ一面と、ホテル、宿泊関係者がお客さんと直接取引をする。中間搾取を省

くことができる。もうひとつは島でできる産物をADSLにのせて、直接、消費者との取引ができる。どうしても安心して住める島にするためには、条件を早急に整備しなければならないということで、総合病院ができ、飲料水の淡水化プラントができ、そしてADSLができた。これから関係各位に働きかけて島の活性化に取り組みたいと考えている。

4. 沖縄との地域間交流の取り組み、観光・行政を含めた奄美群島の各島との連携

沖縄との地域間交流については、既に本町としては文化、音楽、スポーツ面の交流が続いている。一つ例をあげると「やんばる駅伝」。これはやんばるの離島や（北部）の方々と一緒にやってやっているが、第10回目の記念大会を与論でやって、また、12回目の大会も与論で開催することになっている。体育面だけでなく文化面も北部との文化交流を盛んにやっている。ヨロン・おきなわ音楽交流祭も子供達にとって良い交流ができています。今後とも交流は続けていきたいと考えている。

〈文化面〉

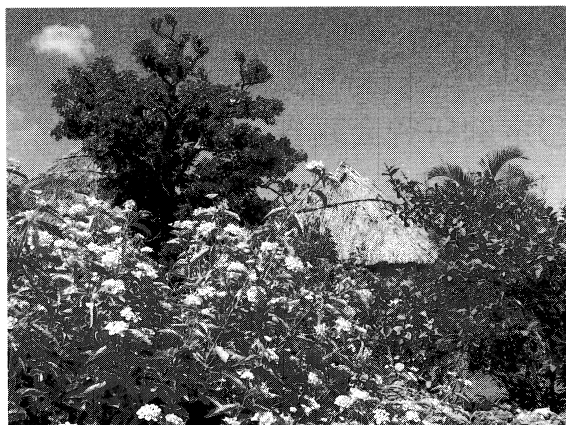
- ・ヨロン・沖縄音楽交流祭
- ・パナウル少年の船

〈体育面〉

- ・やんばる駅伝
- ・南西諸島杯サッカー大会
など

〔沖縄との地域間交流の具体例〕

先般、北部と奄美諸島等との連携した奄美・やんばる広域圏交流推進協議会が開催された。その中で協議会を中心として、実質面では奄美と北部とのPR活動や特産品の展示などを行い、奄美と沖縄・北部との一体性をこれから持っていこうということで事業を計画しているところである。



おわりに：町財政の厳しい中で、町の単独存続に向けた施策

国から、施策をどうするという具体的なものが出ているので、それについて具体的に述べるということは非常に難しい。今まで、国・県の援助がない時代に、私どもの先輩方は、このヨロンをつくってきた。そこには普通では考えられない強い団結があっはじめてなされたと思っている。私達は全町民が心をつなげて、その苦しさや厳しさに対しての対応を考えていった時に、必ず、その困難を乗り越えていけると考えている。

すでに財政が厳しく、予算の組み立てができない状況にある。平成17年度を過ぎた時のこの厳しさは、想像に余りあるものがある。我々はこのことを肝に銘じて、前もって対応していく必要がある。これまでも職員はもちろん、町民各位に大変なリスクをお願いしてきた。これから先、ますます厳しくなっていくと思うが、徐々に調整して、お互いが納得していけるような島づくりに邁進していきたいと考えている。